

## 第 80 回 山口西田読書会

2015.6.27

前回（第 79 回 2015 年 6 月 20 日）のプロトコル（萬納寺）

参加者：佐野教授、深野、来栖、千葉、奈原、牛見、濱野、福田、植田、桑原、橋本、杉山、岡田、岡部、萬納寺（順不同）

### 【純粹経験は多義的な概念】

その多義性が解釈者の間で一致しない。上田閑照氏の説、下村寅太郎氏の説、小坂国継氏の説、高坂正頭氏の説など、当会でも色々な説が紹介され議論されてきた。

当会のメンバーからも次のようなものが示されている。

来栖哲郎氏

かくして〈善の研究〉における純粹経験の概念は最終的にはその第 1 編における直観の哲学、すなわち直観についての哲学および直観としての哲学として理解されるべきであると結論づけられよう。（「西田幾多郎（善の研究）における純粹経験について；直観の哲学」山口大学哲学研究第 16 卷 2009 年より抜粋）

佐野之人教授 1

純粹経験のレベル

- 1) 考究の出立点としての初発の純粹経験
- 2) 思惟や意志の根柢ないし背後の純粹経験
- 3) 知的直観としての純粹経験

1～3のプロセス（円環運動）を繰り返すことにより当該の経験はどこまでも豊富深遠となる。

- 4) 最大最深の知的直観としての宗教的覚悟

---

#純粹経験：主客未分、知情意の分離なし、**判断**・意味以前、統一作用が無意識、  
厳密な統一

（第 65 回西日本哲学会 2014 発表の参考資料「純粹経験とは何か—西田幾多郎（善の研究）における純粹経験のレベルに着目して—」より抜粋）

佐野之人教授 2

（善の研究）における西田の人間観—神、人、世界—

（純粹経験有り）はすでに**判断**であり、意識の立場である。

人間はたえず分かった気になりながらも、どこまでも分からないという事を通じてのみ人間でありうるかもしれない。（山口大学哲学研究第 21 卷 2014 年より抜粋）

### 【佐野先生より純粹経験の本書での流れをレビュー】

第 1 編 一生懸命に断岸（崖）を攀ずる没我状態

第 3 編 至誠 最も深い処の要求に従うのが至誠 芸術、道德、宗教の極致  
真の自己を目指す

第 4 編 見神 宗教的要求の頂点

【前回の哲学的問い】

第4編 1-4にある(意識の分化発展は統一の他面であってやはり意識成立の要件である)は、分化と統一が同時に意識されないことを意味しているのか、分化と統一を同時に見る目を許容するのか。意識の統一をたもったまま分別することは否定されるのか。

「善の研究」は動より静を見、静より動を見ることを知的直観として許容している。

【第1編第1章〈純粹経験〉の第5段落を読む】

「意志は主客の統一である。」という箇所を理解を深めるために。

第3編第1章〈行為(上)〉第1~4段落を参照。

3-1-1 行為とは、その目的が明瞭に意識せられている動作の謂である。

3-1-2 行為とは右にいったように意識されたる目的より起こる動作のことで、すなわちいわゆる有意的動作の謂である。ただし、行為といへば外界の動作をも含めていうが、意志といえば主として内面的意識現象をさすので、**今行為の意識現象を論ずるということはすなわち意志を論ずるということになるのである。**

意志の一番高まったもの一決意

意志は主客の統一である。 主—観念 客—行為

行為が伴わないと意味がない。

思惟 観念的

3-1-4

統覚 思惟 物および自己のすべてに関する観念に対する統一作用

想像 同上

意志 **自己の活動のみ**に関する観念の統一作用 現実的統一 統一の極致

〈意志〉〈思惟〉〈想像〉の3統覚に関して概念を整理した。

【哲学的問い】

第3編 1-5にある「自然を想像するには自分がまず**その物になって**考えてみなければならぬ」の箇所。その物に成りきれない私は、そういうものだと理解して(分かったふりをして)読み進めなければならない。「自然を想像、その物になる」とはどういう事なのか? その後の美術家の(入神の域)の箇所は理解できる。